

Thomas Hardy と夢想性について

大 桃 道 幸*

(1997年10月30日受付, 1997年12月17日受理)

要旨: ロイ・モレルは *Far from the Madding Crowd* の主人公 Gabriel Oak の生き方を例に挙げて、幾多の苦難を乗り越えて人生の勝利者となる Oakこそハーディが称揚する人物像であるとし、夢想家や夢想的な生き方をハーディは非難しているのだと論じている。モレルの立場はハーディの小説の悲劇性を登場人物たちの非現実的で夢想的な生き方に求めるもので、宿命論に立脚した従来のハーディ観を打破するという点で高く評価されるべきだが、ハーディの小説を単なる人生訓、処世訓のレベルで捉えている点に不満が残るし、ハーディがその後 Oak のような人物ではなく、むしろ自己破滅型の夢想家を執拗に描き続けた理由を明らかにしはしない。ハーディの小説、とりわけ後期の小説に登場する主人公たちの多くは芸術家ないしは芸術家肌の人物であるが、夢想性は彼らの生来の気質であって、それはしばしば人を破滅に導くものの、彼らにとっては創造力の源泉であり、彼らの存在そのものの基盤であると言ってよい。また彼らにとって、理想の恋人像が生身の人間よりも現実的であるのと同じように、想像の世界のほうが実際の世界よりも一層現実的なのである。従って、芸術家ないしは同様の気質を備えた人物が実社会で生きてゆくことそれ自体が多くの矛盾をはらみ、必然的に悲劇が生じることになる。厳しい現実の中で幸福を獲得する Oak を称える一方で、自分自身苦悩の人生を歩んだハーディは、虚しく夢を追求め破滅してゆく人々を、大いなる共感を持って描き続けざるを得なかったのである。

Thomas Hardy (1840-1928) の小説の諸相はさまざまな批評理論に基づいた研究によってすでにその多くが明らかにされており、構造主義や心理分析、デコンストラクションさらにはフェミニズムといった立場からの Hardy 研究がさかんな今では、宿命論に立脚した哲学的考察は極めて古めかしいものとなり、社会的な研究もすでにその新鮮さを失っているように思える。近年の Hardy 研究はいづれも啓発的で示唆に富み、読者に知的興奮と新しい Hardy の読み方を提供するものであるが、いま一度テキストに向かいあってみると、Hardy 文学の根源的な部分に関わる問題のいくつかは素通りされ、手つかずのまま残されていることに気づく。例えば、Hardy の小説の多くは 'tragic novel' と呼べるものであり、その悲劇性の解明が Hardy の文学を理解する上での大きな課題であるが、その手がかりとして極めて重要だと思われる登場人物たちの夢想性の問題はほとんど見過ごされたままである。Hardy の小説に登場する人物たちの多くが夢想家であるために、彼らの気質・性格が比較的違和感なく

受け容れられ、そのためにかえって彼らの夢想性の問題が見落とされてしまうのだろうか。本稿では Hardy の小説に登場する夢想的な主人公たちと彼らの生き方を考察し、Hardy と夢想性の問題を検討してみたい。

F. B. Pinion は Roy Morrell の Hardy 論について言及し、'This is refreshing criticism because it challenges many stale judgements inherited from the critics, and insists on a faithful reading of Hardy.'¹⁾ と述べているが、Pinion が評価する Morrell の主張の一つは、Hardy が描いた人物たちは運命の手の中にある操り人形ではなく、選択肢を与えられ、決断はそれぞれの自由意志にまかされているということであった。Morrell は彼の Hardy 論の中で、*Far from the Madding Crowd* (1874) を 'an Introduction to Hardy's novels' とし、この作品を 'more typical of Hardy than a casual reading and a simplifying memory might indicate'²⁾ とみなしている。*Far from the Madding Crowd* は Hardy が初めて 'Wessex' という古代の地名を復活させて用いた、彼の初期の傑作小説の一つであり、美貌の女性 Bath-

sheba Everdeneに想いを寄せる誠実な若者 Gabriel Oak が幾多の試練を乗り越えて彼女とめでたく結ばれるという、Hardy の小説の中では稀な、幸福な結末をもった作品である。しかし、Morrell がどのような意味あいでの 'typical' という言葉を用いたのかは議論の余地があるところだが、この小説も視点を Gabriel Oak から他の人物に移してみれば、Sergeant Troy とその愛人 Fanny Robin が死に、Farmer Boldwood は気が狂い、Bathsheba もかろうじて破滅を免れるという、極めて悲劇的な作品であるとも言える。

Morrell は *Far from the Madding Crowd* の中心主題の一つは 'romance' と 'reality' の問題であるとし、主人公 Oak を reality の側に立つ人物、他方 Troy, Boldwood, Bathsheba を romance の側に立つ人物として対比させ、romance と reality のどちら側につくかによって、それぞれの人生が決定されると述べている。つまり、ロマンチックな非現実的な生き方、夢想的な生き方は人を破滅させ、現実を直視した逞しい生き方だけが人を成功に導くというのである。Morrell はさらに 'Hardy is disparaging romance, the dream and the dreamer.'³⁾ と論じ、Oak の美質について次のように述べている。

The essential thing about Gabriel is not that he is in contact with Nature, but that he is in contact with reality. He neither evades it nor resigns himself to it, he makes something out of it.⁴⁾

つまり、Oak は現実から逃れようとしたり、諦めたりすることなく、現実を正面から見据え、たとえ厳しい状況であったとしても、現実の中から何かを生み出してゆく。そして Morrell は Oak とは対照的な人物として Boldwood を次のように描写している。

Boldwood is the dreamer himself, and the unreality is in the way he approaches Bathsheba, seeing in her not a woman of flesh and blood, but a romantic dream.⁵⁾

すなわち、Morrell によれば、Boldwood は夢想家であり、彼の非現実性は Bathsheba に対して懐く幻想に表れているのである。また James Gibson は Bathsheba の生き方が Boldwood のそれと同質であることに注目して、次のように述べている。

In *Far from the Madding Crowd* Bathsheba re-

fuses to face the truth about Troy, Boldwood the truth about Bathsheba. It is dangerous, Hardy is saying, to put people on pedestals, to love vision rather than reality.⁶⁾

ここで Gibson は Bathsheba と Boldwood が共に真実を見ようとしないうことを指摘しているが、Morrell と同様、Hardy は現実ではなく幻想を愛することの危険性、非現実的な生き方の危険性を強調しているのだと言っている。*Far from the Madding Crowd* は Hardy の他の多くの小説と同様に農村がその舞台であって、そこはのどかで牧歌的な田園風景ではなく、リアリステックな厳しい生存競争の世界である。そこでは人々は絶えず自然の脅威にさらされ、四季の移り変わりや天候の変化に応じて、現実的・的確な対応と、たゆまぬ労働が要求されるし、予期せぬ出来事や災難も彼らを待ち受けている。すなわち、*Far from the Madding Crowd* の世界は本質的に 'a romantic dream' や 'vision' といったものとは相容れない世界なのだ。物語の冒頭で、番犬が羊を深追いしたことが原因で Oak がすべての羊を失ってしまう 'A Pastoral Tragedy' と題されるエピソードが描かれているが、事件の後で射殺される哀れな犬の運命は、農村社会に生きる者すべてが直面せざるを得ない過酷な現実、生と死が隣り合わせにある農村社会の厳しい掟を象徴しているものと言えよう。全財産を失った Oak は死の誘惑に駆られるが、この経験を胸に刻みつけて、再び一介の労働者として出発する。Morrell はこのような Oak の生き方、現実を直視し、現実を肯定的にとらえる姿勢こそ Hardy がわれわれに訴えたかったものだとするが、Oak の美質についてさらに注目すべきことは、逆境にあってもなお Oak が常に感謝を忘れないということである。すなわち、すべての羊を失って無一文になっても、Oak はもっと悪い状況もあり得たとして、自分が Bathsheba とまだ結婚していなかったことを神に感謝するのである。

Far from the Madding Crowd の中で、Hardy は Gabriel Oak という一人の理想的な人物像を通して、人間の生き方の一つの指標を示していると言えるが、Oak のような人物は Hardy のその後の小説にはなぜかあまり登場しない。しいて一人あげるならば、*The Return of the Native* (1876) の Diggory Venn が Oak に近い人物だと言えるかもしれないが、Hardy の他の小説ではむしろ *Far from the Madding Crowd* の中で破滅していった人物たちのように、'vision' や 'a romantic dream' にとりつかれた人々が多く登場し、しかも中

心的な人物になっている。The Return of the Native の Eustacia Vye と Clym Yeobright, Tess of the d'Urbervilles (1891) の Angel Clare, Jude the Obscure (1895) の Jude Fawley, The Well-Beloved の Jocelyn Pierston など、枚挙にいとまがない。Far from the Madding Crowd を書き上げて以降、なぜ Hardy は Oak のような人物をあまり登場させなくなってしまったのだろうか。Hardy は平穩無事に暮らす人々や成功を収めた人々よりも、夢や希望を抱きながらも、それらを実現させることなく、自らの夢や希望に囚われて、不遇のうちに人生を終えてしまう人々に終生深い関心をいだいていたようだ。そして 'vision' や 'a romantic dream' に囚われた人々を見つめる Hardy の視線には、彼らに対する非難よりもむしろ憐れみ、しばしば共感に満ちた憐憫の情が込められている。また Hardy が描いた夢想的な人々の中には、Boldwood や Troy とは違って、Jude のように人間としてのスケールも大きく、その理想も高邁な人物が少なくない。このように考えてみると、'Hardy is disparaging romance, the dream and the dreamer'⁷⁾ という指摘は一面では正しいものの、Morrell は夢想性の問題を十分に議論しておらず、Hardy の小説の中から単なる人生訓、処世訓を引き出しているに過ぎないし、そうすることによって Hardy の作品をかえって卑小化してしまっていると言えなくもない。Hardy の小説、とりわけ後期の小説では、人と夢想性という問題が極めて大きな意味を持っており、この問題を解明することが Hardy を理解する上での一つの大きな鍵ではないかと思われるのである。次に、Hardy の小説に登場する典型的な夢想家について考察してみよう。

人と夢想性、あるいは夢と現実という問題を考える場合、見落とすことのできない作品に *An Imaginative Woman* という短編小説がある。この作品は1893年に書き上げられ、翌1894年 the *Pall Mall Magazine* の4月号に Arthur Jule Goodman の筆になる7葉の挿し絵入りで掲載されたものであるが、Hardy が最初に考えた題名は 'A woman of Imagination'⁸⁾ であった。物語は夫と三人の子供のいる30歳過ぎの女性 Ella Marchmill が、実際には一度も会ったことのない詩人 Robert Trewe に恋をし、彼との出会いを切望しながらも果たせず、彼によく似た男の子を出産して間もなく死んでしまうという筋立てである。またこの筋立ての中には、実際には姿を現すことのない Trewe の自殺という悲劇が組み込まれており、彼の物語と Ella の物語は互いに共鳴しあって、比較的単純なプロットに奥行きを与え、作品の悲劇性に微妙な陰影を付与し

ている。*An Imaginative Woman* は Ella と Trewe がともに夢想家であって、二人とも現実の生活の中では生を充足できないという点で極めて Hardy らしい作品であるが、銃器製造業を営む実利的な夫との結婚生活に不満を抱く Ella が Trewe という未知の男性への憧れを募らせ、現実の世界から逃れて、夢想の世界に生きるようになり、Trewe の自殺を知って、生きる意欲を失ってしまうという過程に、夢想家の典型的な自己破滅のパターンが見られる。また、実際に一度もその姿を見せない Robert Trewe という詩人も、理想の女性像を追い求め続けるが、その夢を叶えられずに自殺するという、やはり自己破滅型の人物である。彼は、Ella の生き方を支配するという点で、その姿を全く読者の前に見せないものの、作品の中ではもう一人の主人公とも言えるような重要な役割を果たしていると言えよう。

Ella が 'imaginative' と形容されるなら、理想の女性を追い求めて自殺した Trewe はさらに一層夢想的な人間であった。彼は豊かな感性と想像力によって、新進詩人として活躍していたが、或る日突然自殺してしまう。Trewe の自殺について読者は多くを知ることにはできないが、彼は友人に宛てた手紙の中で、もし自分に優しい心を注いでくれる女性が身近にいたならば、生き続けてゆくだけの価値を人生に見いだしていたかもしれないと語り、さらに次のように述べている。

I have long dreamt of such an unattainable creature, as you know; and she, this unattainable, elusive one, inspired my last volume; the imaginary one alone, for, in spite of what has been said in some quarters, there is no real woman behind the title.⁹⁾

ここで Trewe は、最後に出版された詩集に靈感を与えた女性は、一部の憶測とは違って、実在する人物ではなく、追い求めても得られない想像上の女性に過ぎないのだと語っているが、Ella と Trewe という互いに相まみえることのない男女は、夢想性という点で極めてよく似ているだけでなく、二人がともに文学的な気質を持つという点においても類似している。すなわち Trewe が詩人であるならば、Ella もまた John Ivy という男性名のペンネームで自作の詩を雑誌に投稿しているアマチュア詩人で、時には有名な雑誌に作品が掲載されることもあったのだ。実際、Ella が Trewe を強く意識するようになったのは、ある時かなり有名な雑誌の同じ頁に彼女の詩が Trewe の詩と一緒に掲載された時のことで、その時 Trewe の詩は大きな活

字で頁の上の方に、Ellaの詩は小さな活字で下の方に印刷されていたのだった。Ellaの気質はおそらく文人であった彼女の父親から受け継いだものと思われるが、その気質は父親と同様に彼女を文学活動、すなわち詩作へと向かわせ、Ellaにとって、詩作活動は結婚生活で鬱積した感情の捌け口でもあった。ところで、Treweの自殺で連想されるのが *Alicia's Diary* (1887) に登場する風景画家の M. de la Feste である。M. de la Feste は婚約者の姉である Alicia に恋をし、それが叶わぬ望みであることを悟ると、牧草地にある堰に身を投げて自殺してしまう。彼もまた理想の女性を追い求めていて、Alicia にその理想像を見いだしたのであるが、実際に言葉を交わす以前に Alicia に恋してしまう。M. de la Feste は Trewe と同様に芸術家であり、その生き方が夢想的、非現実的である点で Trewe に極めてよく似た人物であると言える。

Hardy の小説に登場する夢想的な人物を考察しようとすると、主要な登場人物のほとんど全てを網羅してしまうかもしれない。*The Return of the Native* (1878) の女主人公 Eustacia Vye は Paris から村の青年 Clym Yeobright が帰郷するという知らせを聞くと、実際に会う前から彼の姿を理想化し、自分を Egdon Heath から救い出してくれる白馬の騎士のように考え、恋に落ちてしまう。また、Clym も Eustacia を理想化し、彼女を自分が計画している学校の教師にふさわしいと考え、母親の忠告や教師には向いていないという Eustacia 自身の言葉にも耳を貸そうとしない。Eustacia と Clym の結婚は結局破綻してしまい、のちに大きな悲劇を導くことになるのだが、二人の結婚がうまくゆかないであろうことは、当事者以外の誰の目にも最初から明らかであった。また *Tess of the d'Urbervilles* (1891) では、Angel との出会い、結婚そして離別が Tess の悲劇を決定づけることになるのだが、彼女を救うはずの Angel も実際には理想主義的な夢想家で、Tess を一人の血の通った人間として見ているのではなく、'a visionary essence of woman - a whole sex condensed into one typical form' と見なし、彼女を 'Artemis, Demeter'¹⁰⁾ とギリシャの女神たちにたとえて呼ぶ。結婚式の後で 'You were one person; now you were another.' と言って Tess を冷たく拒絶するのも、Angel が彼女に向かって自分が愛したのは 'Another woman in your shape.'¹¹⁾ と言うように、彼が理想化した女性の偶像を愛していたからである。また *Jude the Obscure* (1896) の Jude にしても、Arabella の本質を見ようとせず、ひとりよがりの Arabella 像を作り上げるが、彼女の実像はほどなく明らかになり、慙愧の

念に苦しむことになる。時すでに遅く、Jude は Arabella と正式に夫婦の契りをかわしてしまっていたのだ。その後、Jude はいとこの Sue に出会うが、今度は Sue が彼にとっての 'an ideality'¹²⁾ となる。Philo-tonson の言葉を借りれば、Jude は 'the dreamer of dreams', 'a tragic Don Quixote'¹³⁾ であり、絶えず過酷な現実の壁につきあたって、夢と現実の狭間で呻吟することになる。このように Hardy が描いた人物たちの多くは程度の差こそあれ夢想家であり、理想主義者であったりするが、Hardy の最後に出版された小説 *The Well-Beloved* (1897) の主人公 Jocelyn Pierston はまさに夢想家の中の夢想家であって、或る意味では Hardy の小説に登場する夢想家たちを象徴的にデフォルメした人物、Hardy の小説を理解する上で鍵となる人物であるように思われる。次に *The Well-Beloved* を検討してみよう。

The Well-Beloved はもともと *The Pursuit of the Well-Beloved* という題名で 1892 年 10 月 1 日から 12 月 17 日まで 12 週にわたって the *Illustrated London News* に掲載され、その後大幅な改訂が施されて、1897 年 3 月 16 日に Osgood, MacIlvain 社から一巻本として出版された。この作品は連載小説として発表された時の題名が暗示するように、理想の女性像を追い求める彫刻家 Jocelyn Pierston の恋の遍歴を描いたもので、Pierston が 21 歳の時に故郷の幼なじみの娘 Avice Caro を愛し、それから約 20 年後に同名の Avice Caro の娘、さらに 20 年後にはやはり同名の孫娘を愛するが、結局は理想の女性を手に入れることが出来ないという筋立てである。Hardy は 1912 年に Macmillan 社が the Wessex Edition として Hardy 全集を刊行するのに際して、この作品を 'Romances and Fantasies' という分類の中に含めているが¹⁴⁾、とらえることの出来ない理想の女性を追い求めて彷徨する男の物語はまさに 'fantasy' と呼ぶにふさわしい。この作品の基調の一つになっているのは、Hardy 自身の言葉を借りれば 'the theory of the transmigration of the ideal beloved one, who only exists in the lover, from material woman to material woman'¹⁵⁾ であり、主人公の Jocelyn Pierston が愛するのは自分自身の心の中にだけ存在する女性のイメージ、あるいはヴィジョンであって、現実には生きていない女性ではない。'It was not the flesh; he had never knelt low to that.'¹⁶⁾ という語り手の言葉を待つまでもなく、Pierston を引きつけたのは常に霊的なものであった。D. H. Lawrence は Hardy の小説について、'If it were not that man is much stronger in feeling than in thought, the Wessex novels would be sheer rubbish,

as they are already in parts.'と言い、さらに '*The Well-Beloved* is sheer rubbish, fatuity, as is a good deal of *The Dynasts* conception.'¹⁷⁾と述べているが、ここで Lawrence は *The Well-Beloved* に見られるプラトニックな理想主義に強く反発しているのであろう。しかし *The Well-Beloved* における理想の女性追求のテーマは 'all men are pursuing a shadow, the Un-attainable' という 'the truth'¹⁸⁾ の metaphor, つまり獲得不可能な理想の追求という Hardy の文学を貫いている一つの重要なテーマの metaphor であって、Hardy の人生観、世界観を探る上で *The Well-Beloved* は重要な意味を持つのである。

Pierston が追い求める女性像つまり the Well-Beloved は 'a subjective phenomenon'¹⁹⁾ であるが、同時期に書かれた同じ題名の詩 "The Well-Beloved" もやはり愛の主観性をテーマにしている。この詩は、結婚式を翌日に控えた男が夜道を歩いていると、婚約者によく似た精霊が現れて、彼と対話をするという形になっている。一人の男が星の光り輝く空の下を 'O faultless is her dainty form, / And luminous her mind; / She is the God-created norm / Of perfect womankind!' と喜びを声に出しながら、結婚式が行われる Kingsbere に向かって歩いていると、花嫁によく似た姿が彼の傍らに現れる。男が花嫁は Kingsbere Grove の父のところにいるはずだと訝っていると、花嫁の姿をした精霊は、あなたが愛しているのはこの私だけなのだと言う。男が当惑していると、精霊はさらに次のように続ける。

The sprite resumed: 'Thou hast transferred
To her dull form awhile
My beauty, fame, and deed, and word,
My gestures and my smile.'

'O fatuous man, this truth infer,
Brides are not what they seem;
Thou lovest what thou drest her;
I am thy very dream !'

精霊にこう聞かされた男が Kingsbere に着いて花嫁を見ると、なんと彼の目に映る花嫁の姿はもはや理想の女性ではなくなっている。

— When I arrived and met my bride
Her look was pinched and thin,
As if her soul had shrunk and died,

And left a waste within.¹⁹⁾

Hardy はこの詩の中で、生きた現実の女性ではなく理想化された女性、すなわち幻想を愛することに内在する悲劇性を示しているのであるが、*The Pursuit of the Well-Beloved* を書く前年、1891年の10月28日に、Hardy は真実の愛について次のように記している。

It is the incompleteness that is loved, when love is sterling and true. That is what differentiates the real one from the imaginary, the practicable from the impossible, the Love who returns the kiss from the Vision that melts away. A man sees the Diana or the Venus in his Beloved, but what he loves is the difference.²⁰⁾

ここで Hardy は、相手の欠点にまで愛情が及んでいる時、その愛が真実の愛であること、男性は恋人の中にディアナやヴィーナスといった女神たちの姿を見て、現実とは違うものを愛するのだと述べている。小説 *The Well-Beloved* で主人公の Pierston が生涯をかけて追い求めたものは亡き Avice Caro の幻、幻影であり、現実の Avice 二世、現実の Avice 三世ではなかった。それゆえに幻の Avice に寄せる Pierston の想いは、Hardy の言葉が語っているように、真実の愛ではなかったのである。

すでに概観したように、*Far from the Madding Crowd* の Gabriel Oak のような場合は例外として、*The Well-Beloved* をはじめ多くの小説において、Hardy は理想を追求し、虚しく人生を終える夢想家たちを描いている。Morrell は宿命論的な Hardy 論を見直し、人間の自由意志と人生における選択の可能性を強調しているが、はたして Hardy は彼らに単なる反面教師のような役割を演じさせているだけなのだろうか。Hardy が夢想家たちの生き方を通して、単に人生訓とか処世訓をたれるというレベルで小説を書いていたようには思えないのである。

Marcel Proust は *A la recherche du temps perdu* (『失われた時を求めて』)の中で、Hardy の作品全体に幾何学的均整が反復的に見られることに言及し、その均整を象徴する作品として *The Well-Beloved* の重要性を指摘しているが、第五編「囚われの女」の中で Marcel は Vermeer, Stendhal, Dostoevsky あるいは Hardy といった優れた画家や作家は生涯を通じて同じ作品を繰り返し創り出しているのだと言い、Albertine に向かって「偉大な文学者たちは、ただ一つの作品しかつ

くならなかった、というよりむしろ、彼らがこの世界にもたすおなじ一つの美を、さまざまな環境を通して屈折することしかなかった²¹⁾と説明している。さらに Marcel は Hardy の作品の芸術的特質について次のように述べる。

あなたは『日陰者ジュード』のときにもおぼえているでしょう。『愛するひと』のなかでは見たでしょう、父親によって島から切りだされて船ではこぼれてくる石塊が、息子のアトリエにつみあげられ、そこで彫像になってゆくのを？ 『青い目』には、墓石のあいだの平行関係があり、また船の平行線があり、また隣りあった二つの車輦があり、その一方には恋をする二人の男が乗りあわせ、べつの車輦には二人に愛される女の遺体があります。男のほうは三人の女を愛する『愛する人』と、女のほうは三人の男を愛する『青い目』とのあいだの平行関係などもあります。要するに、そうした小説群はすべてたがいにかさねあわせることができるのです、たとえば岩が切り立った島の地盤の上に、高く垂直にかさなっている家々のようにね。²²⁾

ここで Proust は Hardy が書いた小説群はすべて重ね合わせることでできる一つの作品であると論じているのであるが、夢想家たちが登場する Hardy の小説はそれぞれ別の題名を持つ独立した作品ではあるものの、全体を通して見れば、姿を変えた一つの作品であると言えるのかもしれない。そして Hardy が多くの夢想家たちの人生を描くことによって伝えたかったのは、彼らにとって想像の世界のほうが現実の世界よりも現実味があつたということ、換言すれば、心の中の現実のほうが本当の現実よりも真実であつたということではないだろうか。Hardy のほとんどの小説は或る意味で恋愛小説であるといつてよいだろう。しかし、その主人公たちの恋愛の対象は血の通った生身の人間ではなく、彼らの心の中にだけ存在する理想の女性像あるいは男性像であつたり、現実の世界から想像の世界へと移されて、想像の世界でメタモルフォーゼされたイメージである。そしてそのような心の中のイメージ、理想像を追求することが、彼らにとっては本当の現実よりも真実なのである。したがって、例えば Ella にとってはまだ見ぬ詩人 Trewe を追い求めることが真実の人生であり、Pierston にとっては Avice に重なり合う理想の女性像を追求することが人生そのものである。そしてさらに注目すべき点は、Hardy が描いた人物たちの夢想性は彼らの芸術家としての創造力

に結びついていて、彼らを芸術家たらしめている根源的要素であるということだ。『The Well-Beloved』で主人公の Pierston は病気の後で芸術に対する感性と同時に理想の女性像を追求する情熱を失ってしまう。

During the next days, with further intellectual expansion, he became clearly aware of what this was. The artistic sense had left him, and he could no longer attach a definite sentiment to images of beauty recalled from the past.²³⁾

この Pierston に起きた変化が象徴するように、芸術家にとって芸術的な感性、創造力といったものと夢想性は表裏一体であり、その夢想性を失った時に、芸術家としての才能も失われるのである。言い換えれば、現実的に生きることそれ自身が芸術家であることと本質的に相容れないもので、想像の世界そのものが芸術家にとっては現実世界なのである。そしておそらく Hardy はそのような芸術家が一人の人間として実社会で生きることが本質的にはらむ矛盾、不条理、そしてそれらが必然的にもたす不幸を繰り返して描いたのであろう。それはまた小説家・詩人として実生活で幾多の幻滅と失望を味わった Hardy 自身の偽らざる心情の吐露であつたのかもしれない。『Far from the Madding Crowd』の主人公 Gabriel Oak は Hardy が描いた人物たちの中ではまれな存在で、多くの苦難を乗り越えて幸福をつかみ人生の勝利者となる。彼の生き方は夢想家のそれとは対極に位置するもので、現実を見据えた堅実な生き方によって実生活において成功をおさめるといふ意味で、彼は模範的な人間であり、他の登場人物たちを考察する上で座標軸の役割を果たしうる人物だろう。だが、Oak が Pierston をはじめとする夢想家たちとは違って、芸術家としての資質を持ちあわせていないという点は留意すべきだろう。厳しい現実の中から人生を切り開いてゆく Oak を称揚する一方で、夢を追い続けてやまない Pierston のような人々に共感せざるをえない Hardy のアンビバレントな心情に、夢と現実が錯綜した彼自身の苦渋に満ちた人生、詩人・小説家として名声を得たものの、充足されなかつた人生が窺えるのである。

註

1. F.B. Pinion, *A Hardy Companion* (London: Macmillan, 1968), p. 546.
2. Roy Morrell, *Thomas Hardy: The Will and the Way* (Kuala Lumpur: University of Malaya Press,

- 1965), p. 59.
3. *ibid.*, p. 60.
 4. *ibid.*, p. 63.
 5. *ibid.*, pp. 59-60.
 6. James Gibson, "Introduction", *Far from the Madding Crowd* (Everyman Classic; London: Dent, 1984), p. x.
 7. Roy Morrell, *op. cit.*, p. 60.
 8. Richard Little Purdy, *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* (London: Oxford University Press, 1954), p. 60.
 9. Thomas Hardy, *Life's Little Ironies and A Changed Man*, The New Wessex Edition (London: Macmillan, 1977), p. 28.
 10. Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles*, New Wessex Edition (London: Macmillan, 1974), p. 170.
 11. *ibid.*, pp. 271-2.
 12. Thomas Hardy, *Jude the Obscure*, New Wessex Edition (London: Macmillan, 1974), p. 118.
 13. *ibid.*, p. 226.
 14. Richard Little Purdy, *op. cit.*, pp. 283-4.
 15. Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1962), p. 286.
 16. Thomas Hardy, *The Well-Beloved*, New Wessex Edition (London: Macmillan, 1975), p. 193.
 17. J. V. Davies, ed., *Lawrence on Hardy and Paintings* (London: Heinemann Educational Books, 1973), p. 92.
 18. Florence Emily Hardy, *op. cit.*, p. 286.
 19. James Gibson, ed., *The Complete Poems of Thomas Hardy*, New Wessex Edition (London: Macmillan, 1976), pp. 133-4.
 20. Florence Emily Hardy, *op. cit.*, p. 239.
 21. Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu* マルセル・プルースト著 井上究一郎訳 『失われた時を求めて 8 第五篇 囚われの女』 (筑摩書房, 1993), p. 663.
 22. 同上. p. 666.
 23. *The Well-Beloved*, p. 198.

Thomas Hardy and Imaginativeness

Michiyuki OHMOMO*

SUMMARY : Many critical studies have already revealed various aspects of Thomas Hardy's novels, but some essential problems are still left unexamined. One of the unsolved problems is how we should interpret visionary and idealistic protagonists whom Hardy delineates repeatedly in his novels. Roy Morrell once regarded *Far from the Madding Crowd* as an introduction to Hardy's novels, praising Gabriel Oak's resourcefulness and his realistic way of life. Morrell also argued, referring to Troy and Boldwood's ruinous lives, that 'Hardy is disparaging romance, the dream and the dreamer.' Morrell's argument is penetrating enough to discard stale fatalistic readings of Hardy, but it does not go further to explain why Hardy was so much concerned with the imaginativeness of his characters. Hardy is not simply giving us the lesson 'Where there is a will, there is a way,' but showing imaginativeness or visionariness is one of the essential attributes of artists. To them the imaginary world is more real than the actual world just as their imaginary beloved is more real than the woman of flesh and blood. Hardy is desperately aware that imaginative people such as Ella and Pierston cannot realize their ambitions and waste their lives in the actual world, and their frustrated lives show that imaginativeness frequently leads people to destruction, though it is artists' innate nature and source of their creativity.

KEY WORDS : imaginative, dream, reality, destruction

School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Gunma University

* Reprint address : Gunma University School of Health Sciences, Maebashi, 371-8514, Japan